「店じまいの後で」

—二稿—

2025/11/14

〈人物表〉

村沢　義彦（81）　駄菓子屋「むらさわ」の店主

村沢　良栄（51）　義彦の息子

大河　天成（7）　近所に住む少年

大河　竜司（39）　天成の父

1.　「むらさわ」・外観（夕方）

住宅街の中、急勾配な坂の下に位置している小さな駄菓子屋「むらさわ」。
トタン看板の字は擦れて、かろうじて読める程度。
古びた店の中には空の陳列棚が並べられ、駄菓子の空箱、折りたたまれた段ボール箱が山積している。
店主・村沢義彦（８１）、奥から出てきて、錆びついたシャッターを力任せに下ろす。ギギッという音。

2.　村沢家・一階・居間（夕方）

駄菓子屋「むらさわ」の奥はそのまま義彦の暮らす二階建ての自宅の一階部分になっている。そのこぢんまりとした六畳の居間部分。
てかてかとした黒い柱に、無数の身長を測った傷跡。
畳は所々擦り切れてささくれ立っている。
義彦が入ってくるや否や、息子・良栄（５１）、台所からビールのミニ缶両手にやってくる。

良栄　「お疲れさまでした」
と、一つを義彦に渡す。
義彦、良栄をニヤッと見て、受け取る。
二人、ちゃぶ台を囲んでプシュッと缶を開けた後、部屋の隅にある仏壇に向かって掲げる。
仏壇には義彦の妻・栄子の写真。

良栄　「駄菓子屋『むらさわ』最後の日に乾杯」
良栄、一口飲んで、
義彦、わざとらしく一礼して、一口飲む。

良栄　「ミニ缶一個ならセーフ？」
義彦　「馬鹿。お猪口一杯でも病院に怒られるよ」
良栄　「今日は許してくれるよ。流石に」
義彦　「俺が店番してたのは、母さんが死んだ後の五年だけだ」
良栄　「母さんの分も含めたら、三十、五年くらい？」
義彦　「それを言うなら俺の母さんの分もだな。すると六十年以上になるよ」
良栄　「そりゃこの家も寿命になるわな」

義彦「母さん二人が北別府と山根で、俺は江夏みたいなもん。二人の座る畳。他所より擦り切れが一層ひどい。
　　ちょっぴり最後美味しいとこを締めただけよ」

　　と、手首の先で小さく、ボールを投げる振り。

良栄「七十九年日本シリーズね」

義彦「なのにこんなご褒美だけもらっちゃってさ」

　　仏壇には「『むらさわ』のおじいさん　ありがとう」と子供の字が書かれたバインダー。辞書ほどの厚さ。

　　良栄、手に取って中を捲ると、子供達からの手書きのメッセージがぎっしりと綴じられている。

義彦「そうだお前、駄菓子それで足りるか？」

　　良栄の脇には段ボール箱二、三箱の駄菓子。

義彦「ちょっとだけど表にまだあったぞ。さくら大根とか」

良栄「勘弁してよ。もう配り切れないくらいある。さくら大根じゃ余計ダメだよ」

義彦「そりゃ失礼」

　　と、缶を飲み干す。

義彦「店じまいしたらぼちぼち、俺の方もだな」

良栄「いつからだっけ、施設」

義彦「再来週の水曜。取り壊しの翌週」

良栄「車出そうか」

義彦「いい、自分で荷物くらい持ってける」

　　良栄、思わず笑って、

良栄「老人ホーム入る人間のセリフじゃねえよ」

義彦「坂のおかげだな。足腰は」

良栄「ほんと助かるよ」

　　と、缶を飲み干して、バインダーを仏壇に戻す。

良栄「そろそろ真由美ちゃん迎えに来てくれる時間だわ」

義彦「おう」

3. **「むらさわ」の前の通り（夕方）**

　　義彦と良栄、表に出て車を待っている。

　　良栄、坂の下からやって来る車に手を振る。

　　ふと義彦、坂の上の方向を向くと、電柱の影からじ

っと義彦を見ている少年・大河天成（7）に気づく。
義彦が目を凝らすと天成、くるりと踵を返して走り去ってしまう。

義彦「……？」

4. 村沢家・二階・寝室（夜）

畳の寝室。
義彦、布団の上でぐっすりと眠っている。

5. 「むらさわ」の前の通り（昼）

店のシャッターには「閉店しました」の紙。
義彦、竹ほうきを持って通りの掃除をしている。
ふと、坂の上の方に天成が立っているのを見つける。
義彦、訝しがるも、ちょっと考えて、

義彦「（天成に向かって）ごめんね。『むらさわ』昨日で終わっちゃったの。もうお店やってないのよ」

と、天成の方に歩み寄る。
すると天成、困惑した顔。
義彦、天成の様子を見て、

義彦「ちょっと待っててね」

と、踵を返す。

6. 「むらさわ」・店内（昼）

義彦、ガラガラガラッと店のシャッターを上げる。
駄菓子の空き箱をいくつか掻き分けた後、中身の入っているものを見つけ、モロッコヨーグル、さくら大根、コーラガムを手に取る。

7. 「むらさわ」の前の通り（昼）

義彦「はい、どうぞ。こんなのしか残ってないけど」

と、天成に駄菓子を差し出す。
天成、受け取らず、じっと駄菓子を見ている。

義彦「お代はいらないよ。これサービス」

天成、何か言いたそうな顔でもじもじとしている。

義彦「……？」
天成「……違う」
義彦「え？」
天成「……違う」
義彦「あ、違うのが良かったか」
　と、手元の駄菓子を下げる。
義彦「ごめんね、もうこれしか無いんだよね。何が良かった？」
天成「……」
　と、何か言おうとするが、踵を返して走り去る。
義彦「あ、ちょっと」
　天成、坂を駆け上がり、あっという間に横道に入って見えなくなる。
　義彦、その様子を呆然と見上げている。

8. **村沢家・二階・寝室（夜）**
　義彦、布団に入ったまま天井を見上げている。
義彦「……さくら大根じゃ、ダメか」

9. **「むらさわ」の前の通り（昼）**
　通りの掃除をしている義彦、坂の上の方に天成が立っているのを見つける。
　天成、電柱の影からじっとこちらを見ている。
　義彦、諦めたように息を吐いて、
義彦「こりゃ仕入れからだな」

10. **大通り（昼）**
　義彦、自転車を漕いで大通りを渡る。

11. **ショッピングセンター・入口（昼）**
　義彦、駐輪場に自転車を停め、ショッピングセンターに入っていく。

12. **ショッピングセンター・駄菓子屋（昼）**
　雑貨店と衣料品店の間に位置する小さな駄菓子屋。

店内には様々な種類の駄菓子が所狭しと並ぶ。
義彦、子連れ客に混じってレジに並んでいる。手に持つカゴは駄菓子で溢れている。

１３．「むらさわ」の前の通り（夕方）

天成、電柱の影から「むらさわ」の方を見ているが、表には誰もいない。
義彦、その背後に忍び寄って、

義彦　「お客さん」

天成、驚く。
義彦の手には駄菓子で一杯のビニール袋。

義彦　「さあ五円チョコに、ソーダ餅、ヤッターメンにロールキャンディまで。なんでもございますよ」

と、両手で袋を開いて、笑顔で天成を見る。
天成、狼狽えていて、目が泳いでいる。
天成、消え入りそうな声で、

天成　「……あの、えっと」
義彦　「ん？」
天成　「ごめんなさい」

と、坂の上へと駆け上がっていく。

義彦　「え？　ちょっと？」

義彦、追いかけて坂を駆け足で登っていく。
必死に追いかけるが、天成はあっという間に離れていき、横道に入って見えなくなる。
義彦、息が切れて、動きが緩慢になっていく。

義彦　「ちょっと、待って」

１４．坂の上の横道（夕方）

義彦、懸命に歩いて坂を登り、天成が曲がった横道のところで曲がる。
もう天成の姿は見えない。
義彦、落胆。額の汗をぬぐい、両手を膝について、息を整える。
ふと、横道を入ってすぐの小さな公園が目に付く。

15.　坂の上の公園（夕方）

滑り台とシーソーだけがあるこぢんまりとした公園。
義彦、公園に入り、立ち止まる。あっ、という顔。
天成が父・大河竜司（39）とベンチに座っている。
天成、義彦に気づいて驚き、竜司を小突く。
竜司、義彦を見て、苦笑いで会釈。

16.　村沢家・一階・居間（夕方）

ちゃぶ台の上には、お茶の入った湯呑みが二つ。
義彦と竜司、並んで座っている。
天成、少し離れて、さくら大根を食べている。

竜司「よく来てたみたいなんです。これが好きみたいで」
義彦「うん、顔は見たことあるよ」
竜司「覚えてらっしゃるんですね」
義彦「俺が知ってる子なんてほんのちょっとだよ。嫁と母親の時から数えたら、もっととんでもない数の子が来てる」
竜司「俺もその一人でした」
義彦「（驚いて）そうか。おい、覚えてるか？」

と、仏壇の栄子に呼びかける。線香二本と、煙。
二人、笑い合う。
義彦、ちゃぶ台の上に開かれたバインダーに目を落とす。パラパラとめくって、

義彦「こうやってもらってみるとさ、ほんとに嬉しいもんだよ」
竜司「全部のクラスで一時間丸々使って作ったそうなんです」
義彦「ありがたいね。でも、その日に休んじゃったんだ」
天成、パリパリとさくら大根を食べている。
竜司「ええ、おまけに引っ込み思案なもんですから。ほら、自分で渡すんだろ」
と、天成を小突く。
天成、困ったような顔で竜司を見る。
竜司、天成のさくら大根を取り上げて、おしぼりで手を拭かせ、トントンと背中を小突く。
天成、意を決した様にポケットから一枚の紙を取り

出して、義彦に渡す。

天成　「……ありがとうございました」

義彦　「こちらこそ、ありがとね」

義彦、紙を受け取り、天成の頭をポンっと撫でる。

天成、気恥ずかしい顔でそそくさ竜司の元へ戻る。

義彦、それを見て笑い、紙に目を落とす。

紙には「一年四組　大河天成　むらさわのおじいちゃん、ありがとうございました」の文字と、さくら大根など駄菓子の絵。

（おわり）